

「少子高齢・人口減少社会」に向き合おう

平成27年8月
浩志会研究会員代表幹事
佐久間寛道（財務省）

1. 研究テーマ選定の背景

(1) 少子高齢化による危機

医療の進歩を主な理由として、近代に入り先進国で平均寿命の伸長が進んでいます。そのような中、我が国では、昭和45年に高齢化社会（65歳以上の人口比率が7%超）を迎え、少し遅れて、現在までその傾向が継続する子どもの出生数の減少が始まりました。現在、我が国は高齢者が増加する中で、なおトータルの人口が減少するという社会を迎えています。

○ 少子高齢化・人口減少の影響を経済面で見れば、消費者減少による国内市場規模の縮小、労働人口の減少による国際競争力の低下、高齢者の急激な増加による社会保障費の増大・社会保障制度の持続困難性といった課題があり、現実に進行しています。このことに対する警鐘や様々な処方箋は官民間問わず以前から多く提示され、一部は実行されているものの、抜本的な改善には至っていません。

○ また、生活者の視点で見ても、老後の一人暮らしを余儀なくされたり、お金があったとしても介護を十分に受けられない可能性等が待っています。

（注1）一人暮らし高齢者は、1980年（昭和55年）には男性19万人（高齢者人口に占める割合4.3%）、女性69万人（同11.2%）、2010年（平成22年）には男性139万人（同11.1%）、女性341万人（同20.3%）で、今後とも人数・割合とも増加が見込まれています。

（注2）2025年（平成37年）の介護人材は、需要253.0万人、供給215.2万人と、37.7万人不足すると見込まれています。

○ さらに、世代間対立をおおる論調の存在や、（必ずしも少子高齢化が直接の原因とまではいえませんが）高齢者を迷惑なものとして扱う風潮、保育園を迷惑施設として指摘する例が見られるなど、各々が頑張りつつ、相手を思いやり、時と場合に応じて支えあいながら生きていくという、共同体としての根幹部分の劣化ともいえるべき現象が見られる状況になっています。

人口減少にはメリットがあるという指摘もありますが、少なくとも今の日本のような急速な少子化や、地方を中心とする極端な人口構造の変化は様々なひ

ずみをもたらしていると言えるのではないのでしょうか。

また、世界一の平均寿命は喜ばしいこととは思いますが、寝たきり等の生活となり、本人が必ずしも望んでいたとは言えない延命治療が行われている現実が指摘されています。また、あくせく働く親にとっても、心のなかでは手伝いたいと思っている遠方の祖父母・近所の住人にとっても子育てしづらい様々な環境も指摘されています。

(2) 今、課題を「知る」「行動する」ことの意義

ここまで読んで、課題が叫ばれて久しい少子高齢化問題をなぜ今更取り上げるのか、と疑問に感じたのではないのでしょうか。

それは、研究テーマを掲げるといふ貴重な機会に恵まれたことに感謝するなかで、こうしている間も進行している我が国の大きな課題（5年間少子化対策が遅れると将来の日本人は300万人減少すると推計されています）に対し、僭越ながらみな力を結集したいと思ったからです。

あわせて、この議論を通じ、下記のような他の課題に共通する力やヒントが生まれてくるのではと思っています

①「潜在的な危機」への対応力

少子高齢化のような潜在的な危機（課題は認識されつつも、個人レベルの現実の不利益に直面しないため対応が容易でないもの）は、地球温暖化等いくつもあります。したがって、潜在的な危機の具体例を深掘りし、実際に対応していくことは、未だ認識されていない潜在的な危機への対応を含め、我々が住む社会をしなやかなものとするために重要なことと考えられます。

②「困難」な課題への「挑戦」

潜在的な危機には、生活習慣病といった、自分自身への不利益を自分自身で相当程度対処可能な事柄もあります（災害への対応も一定部分これに位置づけられるでしょう）。

このような個人レベルの事柄ですら、対応を先送りにしがちです。少子化、高齢化といった、個々人の価値観が異なり、また、個人とコミュニティ、将来世代を含む世代間で一見利害が異なる課題については、対応しようのない構造問題と思われるかもしれません。

しかし、浩志会では、その自由闊達な議論と覚悟を示す会員に深い感銘と強い刺激を受けました。昨年、私が会員になりたての際参加した夏季全体研修会では、世代の異なる初対面の会員同士で遠慮なく多角的な議論が繰り広げられました。あわせて行われた平成25年度の研究テーマ「我々世代の使命、我々世代の覚悟」の研究報告では、社会の課題等を様々に体感・議論した上で自分

たちの行動指針をまさに「覚悟」をもって宣言されていました。

また、直前一年間の研究テーマ（我々のビジョンを掲げよう～想いを伝えるために～）に対しては、「利他」という崇高な心の実践や、理想の社会を創る・実現するといった決意表明が行われ、最終研修会後のフォーラムとしての行動の継続表明など、メンバーの底力に感動を覚えました。加えて、題材として、高齢社会や次世代育成が相当程度取り上げられていました。

「お互い様という気持ちを個々人が実践できないと、共同体が存続できない」文字にするとありきたりですが、個々人の意志・自由が尊重されるようになってきた素晴らしい状況を損なわずに、その先の行動原理を構築するにはどのようにすればよいのでしょうか。

「他人に過度に干渉されたくない」と「支えあいながら生活する」を融合する価値観は存在するのでしょうか。

「人口減少社会」が「日本人衰退社会」とイコールではないことを願うとともに、研究会員の化学反応に期待しています。

③我々が通るべき道を堂々と通る

様々な課題に向き合うためには、それを自分ごととしてとらえる想像力と責任感が大切ではないでしょうか。

我が国における現在の少子化は、統計的には昭和50年頃に始まったものです（合計特殊出生率が2.0を割ったのは昭和50年）。昭和46-49年の団塊ジュニアを含め、この時代に産まれた我々研究会員は、子育て世代として一当事者でもあります（1973年（昭和48年）の出生者数は209万人。40年後の2013年（平成25年）では半数以下の103万人）。

それぞれの組織等で次世代を育成していく責務を有する我々は、親の介護世代でもあり、少子高齢・人口減少社会の課題に向き合うのは避けて通れない道ではないでしょうか。

④ 世界への発信

超高齢化社会がここまで少子化と同時進行しているのは世界で日本が初めてと言われています。政策として少子化を進めてきた中国をはじめとして、アジア等で高齢化の問題が起これつつあります。ありきたりですが、ここで日本の底力を発揮し、その経験をモデルとして世界に発信し、貢献するチャンスです。

相手への気遣い・思いやり、きめ細かさ、勤勉、様々な良いものを柔軟に吸収するといった日本人の特性を含め、世界のために広めていければと思います。

2. 研究の進め方

(1) アウトプット

最終研修会では、何らかの論点（サブテーマ）について対応するための具体的な提案を含め、議論の集大成の発表をお願いします。

(2) 議論の内容

幅広い課題を含んだテーマですので、どこかのタイミングで個別の論点（サブテーマ）に焦点を当ててください。下記の例示にとらわれる必要はありません。記載のない論点や、切り口を変えた議論を歓迎します。一つに絞る必要もありません。ただ、①目指したい長寿の姿 and/or④働き方改革、については、何らかの形で一度は定例会で議論（＝中間 or 最終研修会で言及）頂けるとうれしいです。

<個別の論点の例示>

① 目指したい長寿の姿

我々が高齢者と呼ばれる世代となった際、どのようなスタイルで生活したいでしょうか（社会におけるやりがいは？、健康上の問題で日常生活が制限されながらの長寿命（⇔健康寿命）を望むか？、終末期医療等の自己決定は？、医療・介護の次世代への負担・持続可能性は？、など）。

そのために我々が今なすべきことは何でしょうか。

② 年齢にとらわれない仕事・社会参加（高齢者の活躍）

豊かな人生経験ならではの仕事、社会的貢献活動、ちょっとした子育てなど、どのようなことが考えられるでしょうか。

③ 子育てをしやすい社会

結婚・出産・育児はかくあるべきだ、という固定的な観念が薄らぐ一方で、個々人の自発的意志の結果、人口が維持されるような状況にはなっていません。

調査によれば、子どもの存在を生きがいと感じる人は多く、子どもは2人以上が理想の数と9割以上の夫婦が回答しています。それを実現できる環境はどのようにあるべきで、どのようにすれば改善できるでしょうか。

④ 働き方改革（育児や介護等をしながら働きやすい職場環境づくり）

理想の子どもの数をもてない理由のひとつとして、仕事の制約が挙げられています。関連して、女性の活躍、長時間労働の是正など、様々な観点から働き方改革が叫ばれています。仕事の質と家庭生活はどのようにすればうまく両立できるでしょうか。組織人・家庭人として自分のできることは何でしょうか。

⑤ 地域の役割

家庭中心に育児・介護を行う時代から、一定程度公的施設で育児・介護を行う時代となっています。

さらに一歩進んで、近所づきあいや地縁団体等の地域社会において、あらゆる世代・あらゆる境遇の人々が協力しあえる形はどのように構築できるでしょうか。

⑥ 少子高齢・人口減少社会での産業競争力強化

生産年齢人口の減少というマイナス面があるなかで世界に伍していくためには、既存の技術力の活用を含め新たな価値を創造し、世界に広がるマーケットに一層ぶつけていく必要があります。

現在の世界情勢のなかでは、日本発で稼ぎ続けられない限り充実した社会保障の継続や安定した安全保障環境は難しいと思います。

高齢化という課題先進国の強みを活かすことも含め、産業の国際競争力強化という観点でどのようなことができるでしょうか。

(3) 議論にあたっての視点

○ 多様な視点

研究会員メンバーは、考え方や境遇が異なるようであり、世界全体で見れば似たもの同士です。外国人やマイノリティなど、多様な視点や存在を意識する（実際に交流する）ことは、視野を広げる上で非常に重要です。

また、歴史や他国の例、少子高齢化対応の先にあるものなど、時間・空間を跨いだ視点も重要と考えます。

○ 実践と継続性

思いついた方策について、身近なものからフォーラム活動の途中で実際にやってみる（実践）のもひとつのアイデアです。

逆に言えば、政府の文書や各種提言にあるような施策を並べるのは、そこに実現に向けた力が備わってなければあまり意味はないと考えています。メンバーの腹落ちや、周囲の共感を得られるなど、かっこいい、ワクワクする〇(^)〇、といった観点を議論するのもよいと思います。

また、実効性ある方策は、「繋げる」「続ける」ことが不可欠です。個人の想いでも社会全体の対策でも、継続性を得られるポイントは何かの議論を深めることも大切だと考えます。

3. より充実した活動にあたって

(1) 本音の議論

浩志会では、本音をぶつけ合うのが非常に重要とされてきています。日頃は相手を慮って否定的な意見を言わない、という大人の対応をとりがちですが、議論を深めるためにも腹の底から議論しましょう。自分の想いや個人的体験を含め、自分にとっての常識が仲間に大いなる気づきをもたらすこととなります。今回は一見重いテーマですが、前向きに、本音で議論できると確信しています。

(2) フォーラム横断的な活動

毎月実施される月例会、分科会は気づきの宝庫です。また、フィールドワークを行う際はフォーラム共同で企画する、企画したフィールドワークに他のフォーラムメンバーの参加を呼び掛けるなどにより、フォーラムを超えた体験を行うことも議論が深まると思います。

(3) 本会員等との交流

定例会の共通イベントとして本会員との交流をこの2年間行いました。個別のフィールドワークの企画にあたって本会員等の協力を頂くことがありましたし、OB 会員・本会員との交流に研究会員も参加しています。また、夏季全体研修会での各フォーラム毎のプレゼンは、幅広い会員に研究会員の活動をご報告し、叱咤激励頂くとともに、新研究会員にとってこれからの活動をイメージするいい機会となっています。

本会員幹事等とご相談しながら、こうした活動を今後も継続・充実させていきたいと思えます。

(4) 二度の研修会

フォーラム毎に順位がつく仕組みとなっています。その際、定例会・研修会の参加状況も影響します。しかし、これらはいずれも活発な交流を促し、自己研さんを図る単なる手段です。最終的に比べるべきは、個々人の自分自身の変化と友情の深まりです。過度に気にしないことが大切です。

(5) 終わりに

長々と書きましたが、湧き出る想いのままやりたいことをやってみるのが基本です。この文書の記載振りにとられることはありません。

浩志会活動は、刺激的な仲間と交流できるという観点で、参加すること自体に多いなる意義があります。仕事・家庭との調整を何とかこなして定例会等に積極的に参加し、一日でも早く「議論したい！これがやりたい！」との思いがこみ上げることを体感し、楽しく活動していきましょう。

※本稿における意見・考え方は、筆者の個人的見解であり、浩志会及び所属組織とは無関係です。